

「さりげない承認」で子どもを勇気づけよう



は、ほんとうに子どもが望んでいるものでしょうか。親の価値観の押し付け、エゴになってはいないでしょうか。

では、どうやったら「ありのままの君でいい」と伝えられるのでしょうか。それには、日ごろからの「さりげない承認」が大切です。日常のなかで当たり前前のことに注目をしていきます。

子どもが学校から帰ってきて、ランドセルを放り出したまま漫画を読んでいるとします。まったく「ほめ」に値しないその状態にも、「漫画が好きなんだね」と伝えてみましょう。子どもが興味・関心をもっていることに、親も注目していることを示すことが大切です。そうすると子どもは、「そうなんだよ。僕、これが大好きなんだよ!」と感じます。パパは僕のことに興味をもって、見てくれている——これがうれしいんです。

子どもは心に、親の注目を吸収する「巨大なスポンジ」を抱えています。このスポンジは非常に厄介で、とても乾きやすく、すぐにカサカサになります。たまに子どもが「ほめ」に値する行動をとったときだけ、「やったじゃん。もつとがんばれよ」と、バケツでバシャーと水を与えても、そのうち乾いてしまいます。それよりも、乾かないように「ポタ、ポタ、ポタ」と、つねに水を与えて潤してあげましょう。「今日も元気だね(ポタポタ)」

題はやるけど、応用問題はやらないよ。だって90点をとっても10点のミスを怒られるもん。だったら、確実に100点をとれる基本問題だけでいい」

こうやって、自らのハードルを低めに設定してしまいます。可能性にあふれた子どもが、ほんとうにもつたいたない、残念な状態になっていると感じていきます。

彼らがそのまま成長したら、**行き着く先は「指示待ち人間」です。**みなさんの周囲にもいるかもしれませんが、自分で主体的に問題解決を図らない人って、困りますよね。「パパ、これやってもいい？」と確認しないと進めない子どもは、「指示待ち人間」予備軍といえます。

「ほめ」と「勇気づけ」には、そのことば自体には重なる部分がありますが、その違いは、相手を動かそうとする「下心」があるかどうかです。その意味で、「ほめる」と「叱る」というのはまったく同質で、ほめて動かそうとするか、叱って動かそうとするかの違いでしかありません。これが、**アドラーが最もやめるべきだと言っていること**です。

2 相手を操作しようとするコミュニケーションをしてはいけない

「叱る」よりも、相手に伝わる方法がある

次は「叱る」という話をします。もちろん、子どもに対して注意をしたり、改善要求をしたりする必要はありますよね。しかし、怒りという感情を使って相手を思いどおりに動かそうとする作戦は、「ほめる」同様、結局はうまくいきません。こういう話をすると、よく言われます。

「どなるのはよくないと、頭ではわかっているんですが、感情が言うことを聞かないんですよ」

そんなとき、わたしはいつもこうお伝えしています。

「じつは、あなたは感情をすごく巧みにコントロールしていますよ」
 簡単な例を示します。職場でイラツとして、「なんでまた同じミスをしているんだ！」と、部下を「激詰め」モードで怒っているときに、大切なお客様からの着信があったとします。すると一瞬にして、「はい、いつもお世話になっておりますー。あ、納期ですか。もちろん大丈夫です！」と、ご機嫌モードで受け答えることでしょうか。子どもを怒っているときに学校の先生から電話がかかってきても、すぐに態度を切り替えられると思います。